



第 18 回 IFOAM 有機世界会議 (IFOAM OWC 2014) と IFOAM 総会 (GA) 参加報告 ～IFOAM の活動の焦点が急速に転換か?～

特定非営利活動法人アイフォーム・ジャパン (IFOAM JAPAN) 理事長 村山 勝茂
〒105-0004 東京都港区新橋 4-30-4 藤代ビル 5F
アフアス認証センター気付
TEL 03-6809-0824
FAX 03-5400-2273
E-mail organic@ifoam-japan.net

IFOAM の OWC と GA がトルコに！

2014年10月13日～15日、トルコの古都イスタンブールの会議センター(ICC)でIFOAM OWC (IFOAM Organic World Congress IFOAM 世界大会) が、続いて16, 17日両日に会場を隣りの軍事博物館(ワオー!)に移してIFOAM GA (IFOAM General Assembly IFOAM 総会) が開催された。参加者は80余国から約900名で、大会テーマは“有機の橋を架ける”であった。

トルコに IFOAM 大会を招致した立役者、地元主催者 NGO ブウダイの創業者ヴィクター・アナニヤス(大会直前に逝去)の夢であった「有機農業を核にあちこちに橋を架けよう」を体現しようという大会であった。ドライフルーツと乳製品ぐらいしか有機生産物として目立たなかったトルコは、これを機に有機の世界が急速に展開しそうな雰囲気であった。

IFOAM OWC について

私たちの今回の OWC・GA に参加した主な目的は、8月に福島で開かれた「よみがえれ！福島」のつどいの熱気と成果、そして反原発と再生エネルギー促進をより確かなものにするための動議(Motion)の提出・採決であった。この二つを IFOAM を通して世界に伝えようというものであった。

OWC は後述するが既にぎっしりと詰まったスケジュールに割り込むのに折衝を重ね、大会二日目の全体会の初っ端に“Fukushima Memorial Speech、”として実現した。忙しい中、福島の有機生産者代表として参加していただいた菅野正寿さんの落ち着いた厳粛な発言は多くの感動を呼んだ。

OWC の会議の構成は、メインコース、科学・技術コース、実用向けコース、それに分科会が加わり、各コースとも A・B の二本立て、1セッション 90 分で同時並行で進行。これらとは別に、初日・2日目の朝 2 時間と最終日の午後 2 時間の全体会で 9 人の基調講演と菅野さんのアピールがあった。

3 日間でコマ数がこれだけあるので、有機を取り巻くほぼ全ての課題が取り上げられていたが、単語としては regional(地域の)・smallholder(小規模)・rethinking of certification

(認証再考)などが目立ち、あえてひとつキーワードをあげれば“sustainability”(持続性)で、これを社会的・経済的・技術的にどう担保するか提案・議論が多かったようだ。

基調講演では、アメリカのウイル・アレンの「底辺からの反乱、大衆を動員して」は迫力があったし、ブータンの農林大臣リョンボ・イシェイ・ドルジの「2020年には100%有機農業宣言」は圧巻であった。

なおOWCに先立って多くの行事が大会前イベントとして存在し、また何本かのエコツアーも実施された。IFOAMの各種グループの総会や理事会あるいはISOFA(国際有機農業科学者会議)のようなIFOAMと関係の深い組織も、関係者が集まりやすいということでOWC直前のこの時期に年次会議を開いている。IFOAM Asiaも反GMOの各国の現状報告をするということで私たちも召集を受けたが、日程の関係で出席できなかった。

OWCの各セッションは全体会を除いてどの時間帯も10~14本同時進行なので、よほど気をつけないと見逃した魚は大きい結果になりかねない。いきおい目指したスピーカーやテーマを追いかけて会場間を小走りに渡り歩くことになる。IFOAMの公式言語は英語だが、地元の人にはトルコ語が多い。必然的にイヤホンの世話になるが、これがまたパスポートとの交換なのでわずらわしい上に時間がかかるのには閉口した。こうした会場や廊下で顔なじみの日本人や懐かしい古株にばったりという楽しみもある。懐かしいといえば、私が前に理事長をしたURGENCI(世界の提携・CSA・AMAP・GASなどのネットワーク)の分科会があったので、終了直前に顔をだし、そのまま事務局長ジョセリンたちとトルコ風居酒屋に行った。参加者にはURGENCIの副理事長のシー・ヤン(中国)がいて、彼女を中心に2015年下期には北京で第5回URGENCI大会(神戸が第3回、その後アメリカで第4回)開催について話し合っていた。アメリカのCSAの顔ともいえるエリザベス・ヘンダーソンがURGENCIの名誉会長として同席していたし、田坂興亜さん・古沢広祐さんも雰囲気を楽しんでいた。一時、IFOAMとURGENCIの合体が模索された時期もあったが、互いの特長を生かして相互乗り入れしている現状は、橋渡し役をした私としては嬉しい限りだ。

最終日には大会宣言が高らかに発せられ、「気候変動・貧困・栄養不良・毒素暴露・エコシステム劣化・資源欠乏・社会における底辺化などをもたらした圧倒的な慣行農業によって形成された世界の流れを、科学的知見と幅広い経験に基づいた有機農業で逆転することが可能であることを示し…、草の根民主主義・徹底した透明性・多様性のある実践で持続する社会の実現を図ろう」と呼びかけた。なお以前から会員にアンケートがとられていたIFOAMの名称変更は、見て聞いてすぐに会の性格を理解してもらうことができるように、IFOAM・Organics Internationalということになり、宣言もこの名で発表された。事務局長マルカス・アーベズは閉会の辞で、「・・・持続性のある農法による健全な、栄養豊富な食料を地域内、あるいはごく近くから供給できる体制を作り上げることで、増大する世界の人口に食料安保を提供できるし、有機農業の普及でそれが可能になる、・・・」としたうえで、有機農業への世間の認識の向上の必要性と有機農業言語が通じにくい政治家や官僚へのたゆまぬ働きかけの重要性を訴えた。こうして有機農業運動の深まり、底辺への拡大を参加者に感じさせて3日間にわたるOWCが閉幕した。

GAについて

総会は40か国、292名(他は委任状、なお今大会からIFOAM ジャパンも一票をもつ)の参加で開かれた。事業報告、決算が採決された後、activity group(活動をになうグループ)として地域グループと部門別グループが壇上で紹介され、IFOAMの活動の焦点が地域重視に変わってきていることを演出した。国別として、日本・フランス・イランが紹介され、大きな地域別として誕生したIFOAM アジアも喝采を浴びた。

次に私たちが待っていたハイライトがくる。“A Moment of Inspiration, Testimony of an Organic Farmer from Fukushima ” (仮訳 天からの啓示、福島有機生産者の証言) というタイトルで菅野さんが名誉ゲストとして、先の OWC 時よりもさらに深く福島の叫びを訴え、加えて福島大学の石井先生・若手の有機生産者大河原さんが続き、出席者に大きな感動を与えた 3 人のアピールは各国に持ち帰られ、鮮烈なインパクトを各地にもたらしたに違いない。貴重な時間帯に福島の代表を受け入れてくれた IFOAM 執行部の配慮に感謝したい。

向こう 3 年間の IFOAM の方向を左右する理事選挙には、現職 9 人・新人 8 人が立候補した。結果は現職 7 人・新人 3 人が当選し、前回のように理事会がほぼ総崩れといった現象はなく、現路線 (地域密着型・CSA 型と OGS/基準・認証路線の両輪立て) が承認された結果である。理事互選でアンドレ・ロイ理事長の再選、スイスのフランク・アイホーン、ナンビアのマニョー・スミスが副理事長に新任された。評判の良かった前副理事長ロベルト・ウガストとガブリエラ・ソトは地域活動と小規模生産者へのより積極的な参画のため副理事長に再選されることを固辞したようだ。アジアからはインドのマシュー・ジョンの再選、中国のゾウ・ゼジャン (IFOAM Asia 副理事長) の新任で人口大国出身ということもあり厚みが増した。またスペインのエヴァの再選はマシューとの PGS 路線の定着化を示している。

2 回の理事選の間、向こう 3 年間の活動計画・予算が若干の議論のあと採択された。また IFOAM として特に力を入れたいとして世界理事会提出の幾つかの動議が討議された。土壤保全キャンペーンのアップグレード、反 GMO ペーパーの強化見直し、有機農法における閉鎖サイクルをベスト・プラクティス・ガイドライン (仮訳 最高実践指針) へ載せられるように高めること、流通・市場の公正さと透明さを確保して同じくガイドラインにすることなどである。基本的に反対論は無く、幾つかの友好的修正後、全て採択された。

次が会員からの動議提案である。まず、GMO (遺伝子組み換え) 技術がらみの細胞融合をより有機の原理・原則に近いものに代えること、また有機の育種技術をガイドラインにすることの 2 本が討議に付された。自己資金の全く無い IFOAM ゆえに金の目途がつくことを条件に数々の友好的修正がなされ、採択された。

その後に AFAS 提出・IFOAM ジャパン支持の動議「IFOAM は反原発・再生エネルギー促進に向かって直ちに行動する」が議論された (別紙参考)。実は全ての動議は総会前夜にモーションバザーで賛否の議論が関心を持つ会員と提案者の間で熱心に行われ、問題点はほとんど抽出されている。提案された動議、次期開催地に立候補している国が別個にスペースを与えられ、テーブルをはさんだ活発な議論となる。IFOAM JAPAN 事務局長・渡邊悠とともに、2 人でディフェンダーとして対応した。有機農業者またその関係者にこの動議に原則的に反対は有り得ないが、方法論や活動資金を巡っては心配や危惧の表明があった。このモーションバザー、なんと船を借り切りアジアとヨーロッパを分かちボスフェラス海峡に浮かべ、両大陸をむすぶイルミネーションに輝く橋の下を行き来させて行われた。さて当日の議論は、この動議によって IFOAM が現有勢力でできること、すなわち現ベスト・プラクティス内のエネルギー項目の強化、内外に IFOAM の立場をはっきりさせる声明書への明記、できればポジション・ペーパーの作成などについての質疑応答などを私達 2 人に加え、世界理事を代表してマニョー・スミスがディフェンダーに加わってくれて行われた。このあと、元理事長グンナー・ルンドグレンが「直ちに行動」を削除してはという友好的修正案を出してきた。もとより資金の無いこと・実際行動の困難を承知しているので、議論が袋小路に入ったり、行動を起こすには時期尚早の動議と判断されることを避けるため、私たちはこの修正案を受け入れ、採決がはかられた。全会一致で採択と思ったが、反対コールにおずおずと一人が手をあげた。あとでこの人に何故と聞いたが、IFOAM ジャパンの動議提案に感謝するが、方法論についてもう少し議論が聞きたかった、とあまり要

を得ない対応だった。

さらに、有機養蜂業者の立ち上げ、IFOAM 畜産業者同盟の行動計画に関する動議も可決された。アメリカの OSGATA(有機種子・育種流通協会) から「自分たちの有機種子方針を IFOAM が採用すべし」という動議は、世界理事会が「既に同様な声明があるので二重になる」という理由でノーのコメントを付して討議にかけられたが、趣旨には反対でないので字句の修正で可決された。

3年後の大会をどこでやるか？ なんと BRIC、すなわちブラジル・ロシア・インド・中国がそろい踏みで入札した。OWC 中からブースで広報していたが、GA に移った途端、派手なパフォーマンス合戦で一番札を目指した。特に総会初日の夜、オスマン帝政時代からの由緒ある建物でそれぞれの民俗豊かな演出で競った。一回目の投票でインドとブラジルが勝ち残り、二回目の投票でインドが大勝した。小規模生産者数千人に囲まれた文字通り生産者中心の大会にすると宣言していた。

GA 最後は The Recognition Award といって IFOAM への貢献大として 6 人が表彰を受けたが、なんとグンナーやフランスのアントン・女性 3 人とともに私が入っていた。古くからのメンバーである日本の貢献が評価されたものと解釈している。

結語

IFOAM は有機農業運動、続いて OGS(有機保証制度) で世界のリーダーとして、またボトムアップ民主主義で世界の環境を守る騎手として、さまざまな知見を定義し、声明し、最新の科学的エヴィデンスをもとにそのポジションを、たとえば GMO・気候変動・生物多様性などについて明確にしてきた。その実力は各国政府・国連をはじめとして多くの国際機関が有機農業やアグロエコロジー・農業を核としての地域開発・気候変動などの分野で IFOAM に諮問や助言を常に求めてきたことで、明らかである。しかし残念ながら IFOAM の役目はそこで終わり、政策の実践者はこれら発注者である。今では有機規則のオーナーも認証の法的権威者も政府の手にある。有機全般を民間が運営し、罰則執行だけを政府にゆだねようとした IFOAM の当初の目論見は崩れてしまった。考えてみれば、透徹した民主主義を実現している政府などはないので、IFOAM が甘かったといわれても仕方ない。

また長年、OGS 中心の活動を続けた結果、中小規模の生産者や提携・CSA グループが脱退・不活発化・別の運動体への所属などを始めた。そこで長い論戦ののち、地域の事情を踏まえた地域グループへのテコ入れ、提携や CSA の原理に似た PGS(参加型保証制度)の推進などに方向転換し、実績をあげてきた。一例として、産声をあげたばかりの IFOAM Asia はすでに 100 を超える会員を確保し、(ちなみに日本からは IFOAM Japan のみが会員) 2015 年 6 月ころには韓国で第 2 回総会を予定しているという。日本のより積極的関与、特に理事候補(できれば女性)擁立も要請されている。

栽培・加工技術の集約も劇的に進み、有機を名乗る教授・研究者の多くが IFOAM 関連の組織に連なっている。また各国政府で有機促進担当部局が IFOAM の会員になっているところも増えてきている。会員提案の動議からも、有機の中身の実質的深化や広がりも反映されている。IFOAM の正式な目標として発表したわけではないが、2020 年までには、世界の全体のうちで、有機のプロダクツ、生産者、耕作地が占める割合を 10%以上にしようというのが会員間の暗黙のコンセンサスである。ブータンの宣言は私達にとっては夢のような話ではあるが、せめて IFOAM の大多数と共通の目標に立ちたいものだ。IFOAM は有機システムのオーナーではなく、多くの生産者をはじめとする会員ともども有機全般の普及プロモーターとしてのアイデンティティの確立に変身しつつあるようにみえる。

以上



IFOAM OWC 会場となった、ICC (Istanbul Congress Center) の外観



イスタンブールの街並み① (宿泊ホテル)



イスタンプールの街並み② (OWC 会場周辺の市街地)



イスタンプールの街並み③ (Motion Bazaar の会場となった船から見た市街地)



IFOAM GA が行われた Military Museum



IFOAM GA が行われた Military Museum の中の 1 つの施設 (入口)



IFOAM OWC 中に行われた分科会の様子



IFOAM OWC の 2 日目の全体会でアピールする菅野 正寿さん（福島県有機農業ネットワーク理事長）と通訳の黒田 かをりさん（CSO ネットワーク理事・事務局長）



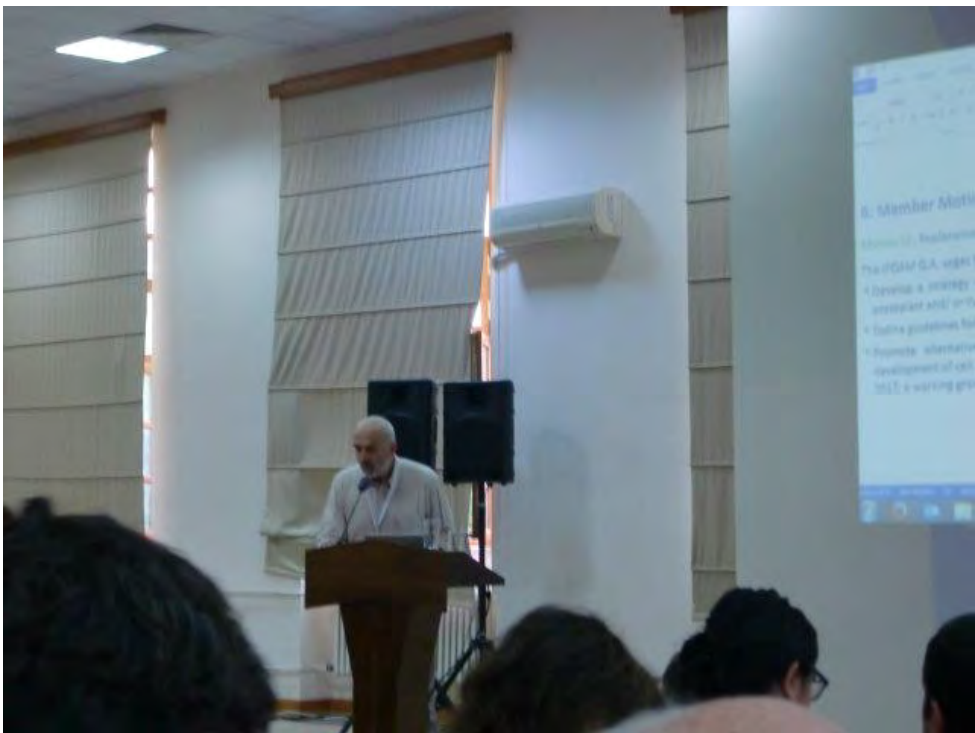
IFOAM OWC の会場での IFOAM ブースの様子



IFOAM GA の様子(写真は IFOAM の Self-Organized Structures の 1 つとして報告する、IFOAM JAPAN 理事長村山と、IFOAM 事務局であるトーマス・シェルプカ (村山さんの左人物)



IFOAM 新 3 役（左から、副理事長：フランク・アイホーン、理事長：アンドレ・ロイ、副理事長：マニョー・スミス）



IFOAM GA にて、議案をプレゼンする提案者



IFOAM GAにて質問・コメントする、グンナー・ルンドグレン（Grolink/スウェーデン 以前の IFOAM 理事長）



IFOAM GAにて Friendly Amendment（友好的修正）を PC にて入力・確認する議長団と事務局

今回の総会で当選した、IFOAM World Board（世界理事）

名前	役職	性別	国名	地域	備考
Andre Leu (アンドレ・ロイ)	President (理事長)	Male (男性)	オーストラリア	オセアニア	2008年より (今回で3期目)、2011年より 理事長
Frank Eyhorn (フランク・アイホーン)	Vice President (副理事長)	Male (男性)	スイス	ヨーロッパ	2011年より (今回で2期目)
Manjo Smith (マニョー・スミス)	Vice President (副理事長)	Female (女性)	ナミビア	アフリカ	2011年より (今回で2期目)
Roberto Ugas (ロベルト・ウガス)	Board (理事)	Male (男性)	ペルー	ラテンアメリカ	2008年より (今回で3期目)、前回まで副 理事長
Mathew John (マシュー・ジョン)	Board (理事)	Male (男性)	インド	アジア	2008年より (今回で3期目)、次回世界大 会で中心を担う。
Gabi Soto ガビ・ソト	Board (理事)	Female (女性)	コスタリカ	ラテンアメリカ	2008年より (今回で3期目)、前回まで副 理事長
Eva Torremocha (エヴァ・トレモッチャ)	Board (理事)	Female (女性)	スペイン	EU	2011年より (今回で2期目)
Gerold Rahmann (ゲロルド・ラーマン)	Board (理事)	Male (男性)	ドイツ	EU	ISO FAR (有機の 研究者の団体) 理事長、新任
Peggy Miars (ペギー・マイアーズ)	Board (理事)	Female (女性)	アメリカ	北米	新任、前職は OMRI
Zhou Zejiang (Zhou・ゼジャン)	Board (理事)	Male (男性)	中国	アジア	新任、IFOAM Asia 副会長